



●予算がないため、扇風機だけの室内は暑い。それでも、楽しいダンスに笑顔が絶えない●日本語の勉強に苦戦する受講者たち



もあつたという。

深いしわが刻まれたその手に持つのは、日本語の教科書。初級の内容が、きちんと教わる機会がなかった日本語を、ここで一生懸命、学んでいる。日本語の歌謡曲を勉強している残留孤児の中村広さん(65)は、あいさつ程度の日本語しか話せない。「人前で歌ってみな

い」と中国語で語った。

池田さんは全国の残留孤児約2200人が国に賠償を求めた集団訴訟の原告団全国連絡会代表だった。国の支援策が実現し、次のステップが帰国者が日本で健やかに暮らせるようにすることだった。

今、この家に集う人たちで中華弁当を作り、オフィス街で販売できないかと検討している。「帰国者にとって日本は祖国で、中国はふるさと。だからこそできる日中友好の役割があるはず」。池田さんは、そう思っている。

(写真と文 杉本昌大)

台東区のJR御徒町駅から

歩いて10分ほどの雑居ビル街。その一角に中国語が飛び交う場所がある。「中国残留孤児の家」。太極拳、卓球、歌や社交ダンス……。誰もが、慣れ親しんだ中国語で楽しもうに語り、そして笑い合う。

旧満州(現中国東北部)に

入植し、終戦後、そのまま取り残された日本人、特に女性や子供たちは「残留婦人」「残留孤児」となった。何十年も中国で生き抜き、ようやくか

くない。

ささやかでも、みんながのびのびと交流できる場所があれば……。自身も残留孤児だった池田澄江さん(64)らのNPO法人「中国帰国者・日中友好の会」は、そんな思いで7月、この「家」を作った。

「よく上の人に怒られた。

(職場から)帰っていつも泣いてた」。残留孤児だった夫と共に20年前、日本にやってきた大久保桂さん(69)が話した。こころの表情は明るい。日本語が覚えられず、つらい毎日が続いた。電車で飛び込みで死のうと思ひ詰めたこと

# 中国語で仲間と語ろう



ホッパ  
2010 東京 09  
ぴれいあ

# 孤立

# 無縁

とは  
です

①「何度も死にたいと思った」と言う大久保さんも、今では「生きたい」という気持ちが強くなってきた

②9月1日のオープニングパーティーでは、池田さん（奥中央）に多くの温かい拍手が送られた

③当時の中国とは形の異なる予防接種の跡が手がかりの一つとなって、日本人であることが証明された



## 台東「中国残留孤児の家」



道路に面した窓の前で談笑する中国残留孤児ら